

# ラスコーリニコフの世界観における 「時」の構造とその役割

高橋誠一郎

## はじめに

『罪と罰』における主人公ラスコーリニコフの形象に注目したルカーチは、ゲーテの『若きヴェルテルの悩み』の主人公ヴェルテルと比較しながら、十八世紀にはヴェルテルが「イギリスとフランスを規定する者となり」、十九世紀の後半には、ラスコーリニコフが「文明化した全ヨーロッパを規定する者」となったと記した。<sup>(1)</sup>言葉を換えれば、ヴェルテルは近代の道をさらに大きく前進させ、一方、ラスコーリニコフは現代への扉を大きくあけたと言えるだろう。

本論において私達は、ラスコーリニコフの世界観において時がどのような構造をし、いかなる働きをしているかを調べることにより、なにゆえに彼が「文明化した全ヨーロッパを規定する者」となつたかを探つてみたい。そして恐らく、私達はこの作業を通して、ドストエフスキイ自身の世界観と彼の特異な時間観を知るための手がかりを得ることができるであろう。

ところで、ラスコーリニコフは登場人物の一人スヴィドリガイ

ロフについて、彼は謎だ、と感じているが、ホルクィストが記しているように、ラスコーリニコフ自身にとつても「本当の自分」はやはり謎だったのであり、<sup>(2)</sup>ラスコーリニコフは小説の中で、己の行為や様々な他者との出会いを通して次第に自己を深く認識していくのである。

私達はラスコーリニコフの世界観における時の構造とその役割を知るために、主な登場人物とラスコーリニコフとの出会いや関係の仕方に注目しながら、まず主な登場人物の世界観とそれを規定している彼らの「時」に対する姿勢を明らかにすることによって、複雑な構造を持つラスコーリニコフの世界観とそこにおける時の構造とその役割を浮きぼりにしていく必要があるだろう。

## 一、マルメラードフ（永遠へのあこがれ）

小説の中でラスコーリニコフとマルメラードフとの出会いは二度ある。よく知られているように、彼の娘ソーニャはラスコーリニコフに自首の決意をうながし、さらに彼に流刑地で生き抜く力を与える。だが皮肉なことにマルメラードフとの出会いは、最初

はラスコーリニコフに放棄しかけていた犯行への決意を再び固めさせ、一度目は自首しようとしたラスコーリニコフの行為をひるがえさせてしまう。ラスコーリニコフは後にマルメラードフから受けた強い第一印象をたびたび思い出し、それが虫のしらせだったと思うが、それ程強く彼を動かしたマルメラードフは、処女作『貧しき人々』の主人公デューンキンを思い起こさせるような貧しい元官吏である。

デューンキンは、貧しい娘ヴァルヴァーラを助けようとして、現実の重さの中で自分の無力さを思い知らされ、絶望におちいり酒におぼれてしまうが、マルメラードフもまた同じような経験を持っている。彼はソーニャを生んだ最初の妻の死後、三人の子供を連れて路頭に迷っていたカテリーナのあまりの窮状を見かねて彼女と結婚する。だが何の落度もないのに人員整理のために職をとかれてから酒に手をつけ始め、今では妻の衣服を質に入れたり、ソーニャが家族を養うために身を売って得た金すらもせびって飲む程に酒におぼれている。デューンキンの物語は、悲劇的な別れで終つたが、結婚したマルメラードフは現実の重みに耐えて生きなければならない。彼には逃げ場がない。ラスコーリニコフが出会うのは、そのような人物である。

マルメラードフは初対面のラスコーリニコフに、一方的に自分の不幸な身の上について語る。それは酒飲みのたわごとに似たもので、事実酒場にいた連中は彼の話しをからかいながら聞いている。だがラスコーリニコフは引き込まれるようにして聞いている。

それは一つには、ラスコーリニコフ自身もかつて「不器量な、ひどい病身の変った娘」との結婚を試み、その直前まで行きながら彼女の死によってそれが果せなかつた経験があるからである。<sup>(4)</sup> ラスコーリニコフは、マルメラードフのうちに自分と同じような性向とその破滅を見たと言えるのではないだろうか。

言葉を換えれば、ラスコーリニコフがとらえたマルメラードフは単なる酒のみではなく、一人の真面目な理想家（空想家）の敗北の姿であると言つてよいだろう。マルメラードフは「苦しい生活の中で他者（カテリーナとその子供達）を救おうしながら、苛酷な現実の中でその理想を果せず、現実から逃れるために酒に手を出し、ついには酒におぼれることによってさらに深くおちってしまった」。ラスコーリニコフは彼の話から、単なるヒューマニズムでは身近な人すらも救えないことを認識しなければならなかつた筈だ。そしてこのような悲惨な生活体験から生まれたマルメラードフの世界観は、ラスコーリニコフに強い印象を与えているように思える。

中村健之介氏は、「ドストエフスキイの道化的人々たち」の「精神的特徴」として、「自分のいま居る『時と所』に無いものに、いわば担保なしの互いの信頼と限度のない許容に、あるいは努力とは無関係に来るべき樂園にあこがれる」という性質をあげている。<sup>(5)</sup> マルメラードフの性格もこの規定にすっぽり当てはまる。彼は他の客から笑われながらも、最後の日の神の裁きでは、ソーニャもそして万人が許され、最後には彼自身も許されるという熱い

期待を述べる。だが同時にこのような世界観は、『地下室の手記』の自ら反主人公と名のる地下室の男に「生きのびているのは、ばかりならず者だけである」と極言させるような「不幸な十九世紀」の「地上でもとも抽象的で人工的な都市ベテルブルク」の非人間的な現実への絶望と表裏をなしている。

なぜ働くのかという問いに対し、ラスコーリニコフは「子供を教えたって、どうせお札はすすめの涙程さ。そればつちのはした金で何ができるか」（第一編三・一七頁——1-3 27）と答えているが、マルメラードフの体験や、ソーニャが針仕事では家族を養えずに、ついに売春婦になつたという話は、真面目な日常的努力が、一瞬にしてふいになる可能性があること、そして日常的な努力が現実の前ではほとんど無力であることをラスコーリニコフに確信させる。

さらに最後の日の神の審判に対するマルメラードフの熱望は、現在の制度に対する鋭い批判者であり、「僕は来世なんとか信じない」（4-221）と語るラスコーリニコフに、あの世ではなくこの世での審判とその実行者の必要性を痛感させていると言えるだろう。そしてそれは、ラスコーリニコフが母からの手紙で妹ドウニヤが紳士ルージンとの結婚を了解したと知った時に、その行為が「今」なされねばならないと意識されるに至る。

すなわちラスコーリニコフは妹が、自分を犠牲にしても愛のない結婚に踏み切り、兄を助けようとしているのだと感じる。だがもしそうなら、ドゥーニャの行為は合法的ではあるが、実質的に

はソーニャの行為とかわらないのではないか。そして妹の犠牲は上に学問をなすラスコーリニコフは、娘のみつきによって酒にひたるマルメラードフと同じではないのか。ふいに彼の心に、マルメラードフの問い合わせが浮んでくる。「わかりますかな、あなた、わかりますかな、もうこの先どこへも行き場のないという意味が？」（3-16）。そしてその時、今まで彼の頭にあった「空想」は、「新しいすごいものある」（4-39）ものに変わった。

### 一、ルージン（未来の名のもとに）

キルボーチンは「マルメラードフの人々とルージンは、長編小説『罪と罰』における二つの極である」と記しているが、ラスコーリニコフの妹ドウニヤに結婚の申し込みをしたルージンは、ペテルブルクに事務所を開こうとしているかなりの財産を持つ四十五歳の七等文官である。ドストエフスキイはルージンについて「彼がこの世の何よりも愛していたのは、あらゆる方法をつくしながら、粒々辛苦の結果手に入れた自分の金であった。その金こそは彼を引き上げて、自分より上にあつたあらゆるものと、同列にしてくれたのである」（4-234）（傍点筆者）と記している。この記述は私達に、金こそが人間をえらくすると信じていたゴリヤトキンの事を思い出させる。ルージンはいわば、成功したゴリヤトキンと言いうるだろう。

彼は自分の考えを「科学はこう言っています——まず第一におのれ一人のみを愛せよ。なぜならば、この世のいっさいは個人的の

利益にもとづくからです」(2-5 116)と述べている。ルージンはこの原理に従つて、ゴリヤートキンの失敗したハードルを「あらゆる方法をつくしながら」飛びこえ、今まさにゴリヤートキンが望んで果し得なかつた、若く美しい女性との結婚を成し得ようとしていたのである。

だがこのようなルージンに対して、ラスコーリニコフは激しい反発を示し、妹ドゥーニャに「ほくか、ルージンか」(3-1 152)と二者択一を迫る。それは一つには、ルージンの選んだ方向が、すでにラスコーリニコフによって捨てられた方向だつたということができるだろう。

すなわち、ラスコーリニコフは苦しい生活の中で、母からの仕送りを受けながら大学とアルバイトを両立させて、学問にはげんでいた。そんな彼が学問を放棄したのは、母や妹の犠牲の上に彼が成功し多くの年収を得るようになったとしても、その時には「おふくろは苦労と悲しみでやせ細つてしまふだろう」と、「妹にはもうと悪いことが起るかもしない」どうして「一生涯すべてのもののそばを素通りして、…中略…母を忘れ、妹の恥辱を忍ばなければならないのか」(5-4 319)という疑問が彼をとらえたからだ。

犯行の後、ラスコーリニコフは妹のドゥーニャと話しながら「もし、おれが一人ぼっちで、だれひとり愛してくれるものもなく、また自身もけつして人を愛さないとしたら、その時はこんなことなどいっさい起らなかつたらう!」(7-401)と思う。ラスコー

リニコフは家族の犠牲を拒否しようとしながら、誤った方法のために、母と妹をむしろより苦しめてしまつた。だがルージンは、科学の名のもとに、始めから他者の犠牲を容認している。

実際、小説の中でもルージンは、自分の目的を邪魔するラスコーリニコフをおとしいれるために、手紙の中で彼を悪く書き(3-2)、さらにドゥーニャを貧しい保護の必要な状態に止まらせるために、彼女が遺産を取る資格があることを隠し(4-1)、最後には、ラスコーリニコフを誹謗するために、ソーニャを泥棒にすらしたてようとする(5-3)。

ルージンのたくらみが暴露されたあと、ラスコーリニコフはソーニャに「ルージンが生きてけがらわしいことをすべきか」(5-313)それとも、ソーニャの義母カテリーナが生きるべきかと二者択一を迫つてゐるが、ラスコーリニコフにとって他者の犠牲の上に肥え太つていくルージンは、高利貸の老婆と同様に打ち倒されべき存在であつたのだ。

ところで私達は、このような正反対に位置する筈のルージンとラスコーリニコフが、目的の重視と現在の軽視という点において、奇妙な類似を示していくことに注意を払いたい。ドストエフスキイは後に、ロスチャイルド、すなわち大金持ちになることを自分の「理想」とした若者の心理を鋭く分析し、「なにか頭の中に常に動かぬ強いものを持つていて、それにすっかり熱中していると…中略…まわりに起るいっさいのことがその本質にふれずにすべりぬけてしまうものである。印象さええもゆがめられたものにな

る。しかも、その上、もっとも悪いのは、いつも言訳ができることである。…中略…『なに、おれには『理念』がある。それ以外はみんな細なことさ』——こう自分に言い聞かせねばすむらしい」と書いている。このような心理は、その時間観に光をあてれば、未来に吸収された時間観と呼べるであろう。

すなわち、すべての事柄は、未来の「理想」あるいは「目的」に向かられ、彼の内に自分の現在に対する軽視が生まれる。彼の行為はすべて、未来のために、という形で包括され、その時、現在の彼の内にある矛盾する感情は、一時的なもの、克服されるべき弱さとして認識される。彼の前にある具体的な事物、あるいは、彼をとりまく人間関係は、目的地に向けて疾走する列車の窓から見る風景のようにかすれてくる。

ルーチンにおいても、金持ちになることを目的とした彼は、自分でドゥーニャを愛しながら、彼女の感情や心の動きを理解することができない。彼の視線は、ドゥーニャの本質にはとどかない。彼女から結婚を拒否された後でも、ルーチンはまだ別の手段をとれば彼女が自分の妻になりえると信じ、失敗は、金をけちりすぎたせいだと考えていい。

一方、ラスコーリニコフは、科学に名を借りたルーチンの考えは、「極端まで押しつめると、人を切り殺してもいい」ということになりますよ」(2-118)と激しくルーチンを批判する。だがこの時、ラスコーリニコフ自身は、犯行に対する激しい嫌悪感を抱きながらも、「おもな目的さえよければ、一つぐらいの悪業は許さ

るべきだ」(6-5 378)という理論に従って、すでに高利貸の老婆を殺してしまっており、彼もまた、よりよき未来のために、理念の名のもとに、現在の自分の感情を軽視し、そして無視してしまったのだ。

後に、ラスコーリニコフは、老婆を殺したことによって「永久に自分を殺してしまった」(4-5 322)とソーニャに語るが、「未来」のために「現在」を犠牲にした彼は、「未来」において、「現在」に復讐されたと言えるだろう。

### 三、ラズウミーヒン（着実なる進歩）

ルーチンの恋敵となるラズウミーヒンは、ルーチンと同様に、「まったくの独力」で「自分の生計」を立て、そしてラスコーリニコフと同じく、貧しさのために「大学を休学」している「珍しく快活でさっぱりした単純なくらい善良な青年」(4-43)である。ラズウミーヒンもまた、ラスコーリニコフやルーチンと同じように「未来の計画」(4-414)を立てる。だが「恐ろしい程の貧乏」の中でもラズウミーヒンは、ラスコーリニコフのようだ、現在の自分の状態を「一氣」に変えようと犯行に踏み切ったり、あるいはルーチンのように、利益のために他人を犠牲にしたりはしない。彼の特徴は、「どんなに困っても閉口しないこと」(4-44)であり、失敗したり、間違えたりしながらも、彼は現在を精一杯生きていく。

言葉を換えれば、ラズウミーヒンは彼に与えられている可能性

の枠内で、しかし忍耐強くその可能性にぶつかるに至った。それで、ラズウミーヒンは、未来に連なるその可能性を徐々に大きなものへと変えていくのだ。

清水氏はラズウミーヒンの父称「プロコーフィチ」(Профильч)がギリシャ語のπρόφυτος < πρόφυτον = 遺伝子から来ていると指摘しているが、現在を精一杯生きれば必ず未来が開けてくるというラズウミーヒンの確信は、時の流れに対する樂観的な態度において、進歩的な時間觀とも呼べるかもしれない。

そして、このようなラズウミーヒンの生き方は、ラスコーリニコフの妹ドゥーニャに対する彼の態度にもはつきりと反映している。

ラズウミーヒンは、ドゥーニャに「ひと目で夢中」になる。だがこの時、彼女はすでに一つの決定をしてしまっており、彼の前にいるのは単なるドゥーニャではなく、ルージンの婚約者ドゥーニャなのだ。時間的には、ラズウミーヒンは明らかに、恋敵のルージンよりもはるかに、あるいは決定的に出遅れてしまっている。

だがラズウミーヒンは絶望しない。彼は現在を精一杯生きる。ドストエフスキイは彼について、「ラズウミーヒンは、どんな気分でいるときでも、自分のすべてを一瞬の間に表現する特性を持つていた」(3-154)と記しているが、このことはラズウミーヒンが他者に向けて開かれた存在であることを物語ると共に、彼が現在を閉じられた時間としてではなく、未来へと連なっていく開かれた時間としてとらえていることをも物語っているように思える。

そして、ドゥーニャに向けられたルージンの視線が常に、金錢

という一種の幕を通して対象に達するのに対し、ラズウミーヒンの視線は、現在を生きているドゥーニャの存在 자체へとまっすぐに向っている。全体に白と黒で描かれた影絵のような感覚すら与えられるこの長編小説の中で、ラズウミーヒンの目に映ったドゥーニャの姿を説明する文章は、あざやかな色彩を持っている。少し長くなるが、引用してみよう。

彼女は「背が高くて、ほ呼ばれするほど姿がよく、しかもその中に強さがあり、みずからたのむところありげな気持ちがうかがわれた——それは一つ一つの動作に現われていたが、しかしけして彼女のものごしから柔らかさと優美さを奪うようなことはなかった。……髪は栗色で、兄よりもいくぶん明るかった。目はほとんど真黒で、誇りにみちた輝きを放っていたが、またそれと同じに、どうかすると瞬間的に、並はずれて善良な表情になるのであった」(3-157)。恐らく、ラズウミーヒンの視線は若い娘ドゥーニャの全体像に迫っていると言つても過言ではあるまい。

ラスコーリニコフは後に、母と妹の二人をラズウミーヒンにゆだねて自首し、ドゥーニャもまた兄が自首してから二ヶ月後に彼と結婚する。

カリヤーキンは、ラスコーリニコフが犯行に走るまでのナターシャの問い、「じゃあ、一度に一財産つく氣なの」(3-27)とシリアにおけるラスコーリニコフを描いた最後の文章「しかし、そこではすでにあたらしい物語がはじまっている、一人の人間がしだいに更生していく物語、しだいに生まれ変って、しだいに一

つの世界から別の世界へと移行し、あたらしい、それまでまつたく知らなかつた現実と接していく物語が」(422)（傍点は共に筆者）を比較しながら「しだいに」という言葉をトストエフスキイが三回もくり返していることに注意を払つて「この『しだいに』のなかに、『一財産』をぜひとも『一度に』つくりたいという願望に対する答えが含まれているのではないだろうか？」と記している。(10)

これらの事柄はいずれも、ドストエフスキイがラズウミーヒンと彼の生き方を好感を持つて描いていたことを裏付けていると言えるだろう。そして忘れてはならないのは、ラスコーリニコフもまた、このようなラズウミーヒンの生き方とまったく無縁ではなかったという事である。すなわちラスコーリニコフは犯行に踏み切る前に一度、ラズウミーヒンを訪れ、彼を通して仕事を手に入れよう試みているのだ。この時、ラスコーリニコフはラズウミーヒンの生き方を理解していたといえるだろう。

だが犯行に踏み切った後で、ラスコーリニコフはもはやラズウミーヒンの世界観を共有することはできない。なぜならば彼は「踏み越えて」しまつたからだ。彼に残されているのは、「ソニヤの道か、スヴィドリガイロフの道か」(354)そのいずれかの道である。

#### 四、スヴィドリガイロフ（現在の享楽）

スヴィドリガイロフがラスコーリニコフの前に初めて姿をあら

わすのは、小説の半ば、ようやく四部に至つてからである。だがルージンと同様に一部の初めに母からの手紙の中で語られた彼の存在とその影は、小説全体をおおっている。

たとえばラスコーリニコフは、酔っぱらつた娘をしつように追いかす見知らぬ紳士にたいして「おい、きみ、スヴィドリガイロフ」(40)と呼びかけている。このことは、この時ラスコーリニコフにとってスヴィドリガイロフという名前は、単なる個人的な名前に止まらず一つのタイプ——とくに女性の弱みにつけこみ、その弱点を利用しながら自分の性的欲望を満たすタイプ——の代名詞としてとらえられていたことを示すと考えてよいだろう。

実際、スヴィドリガイロフは「すべて人間的なものには無関心ではない」とうそぶきながら「理性ってものは情欲に奉仕するもの」(215)と断言する。仮面をおもわせる顔をした、このもといかさまカルタ師は手段を選ばない。彼は十三歳の農奴の娘をはずかしめ自殺に至らさせ、また下男を自殺させ、さらには、ラスコーリニコフの妹ドゥーニャとの結婚を望んだ彼は、かつて自分を獄から救い出した妻マルファをも死に追いかんだ。

ところで、このようなスヴィドリガイロフは自分の奇妙な体験と自分の世界観を初対面のラスコーリニコフに語る。

すなわち彼は自分の死んだ妻マルファの幽霊を三度ともうつで見たし、死んだ下男フィーリカの幽霊とも一度会つたと言いだ」と主張する。そしてさらに彼は「永遠なるものも不可解な観

念として」とらえられているが、実際には「田舎の風呂場のこと  
くすけたちっぽけな小部屋」の「くもの巣」みたいのではな  
いかとラスコーリニコフに問う（4-221）。

このようなスヴィドリガイロフの世界観を聞くとき、ラスコー  
リニコフはなぜか激しくいらだち、憎悪さえ示すのだ。一方、ス  
ヴィドリガイロフはラスコーリニコフの反応を見ながら、「我々  
は同じ森に住む野獸」（4-221）ではないのかと笑いながらたずね、  
「わたしはどうもあなたを見ていると、何か自分に似通つたとこ  
ろがあるような、そんな気がしてならないんです」（4-224）と告  
白する。

一体、スヴィドリガイロフの奇妙な世界観のどこがラスコーリ  
ニコフを激しくいらだたせ、またスヴィドリガイロフは両者のど  
こに共通点を見出しているのだろうか。

ところで、ミドルトン・マリはスヴィドリガイロフの様々な罪  
に言及して、スヴィドリガイロフこそが長編小説『罪と罰』の主  
人公であると主張している。<sup>12</sup> 彼のこの指摘には傾聴に倣するもの  
がある。

だが多くの暗いうわさに包まれたこの人物は、小説のなかばで  
悪夢のようにラスコーリニコフの枕元にあらわれ、そしてラスコ  
リニコフが自首する日の夜明け前に自殺する。ラスコーリニコ  
フが「謎だ」（6-341）と感じるこの人物は読者にとっても謎が多す  
ぎ、主人公と呼ぶにはやはり適さないだろう。

ただ、ラスコーリニコフが「スヴィドリガイロフが出口になる

かもしない」（6-341）と感じ、自分の未来は「ソーニャの道か、  
スヴィドリガイロフの道か」二つに一つであると考えているよう  
に、ラスコーリニコフにとって、スヴィドリガイロフが一種の先  
行者の位置に立っているのは疑いのない事実であろう。そしてこ  
のように考えるとき、スヴィドリガイロフが自分の世界観を、と  
りわけラスコーリニコフに語るのには、特別の意味があると言わ  
ねばならないだろう。

すなわち、私達はさきに、マルメラードが犯行に至るまでの  
ラスコーリニコフにとって、一種の先行者の位置にいたことを指  
摘したが、スヴィドリガイロフは犯行後のラスコーリニコフの前  
に先行者として立っているのだ。

つまり、マルメラードの世界観は、苛酷な現実に絶望したラ  
スコーリニコフに、自分の現実認識の正しさを確認させ、さらに  
現実から抜け出すための犯罪の決行をせまつた。一方、スヴィド  
リガイロフが語った世界観は、嫌悪感を無視し犯行に踏みきり殺  
人を犯したラスコーリニコフが耐えなければならない、感情と理  
性の、あるいは自分の欲望と他の感情との間の分裂の新たなる次  
元を物語っていると言えよう。

換言すれば、理念も目的も持たずに、ただ自分の現在の欲望に  
のみ従つて生きたスヴィドリガイロフは、一見、自分の現在を満  
喫したかに見えた。だが時がたち、現在が過去になつた時、彼は  
自分が欲望の名のもとに無視していた自分の他の感情によつて報  
復されたと言えるだろう。

確かに、感情や感覚は一時的なものとしての性格を強く持つ。だがある種の感情や感覚は、はるかに強い印象を人の心に残す。スヴィドリガイロフが見た幽霊とは、過去において彼が無視してしまった自分の感情や感覚の痛みなのだ。

そしてこの意味において、ラスコーリニコフはスヴィドリガイロフとの最初の出会いの時点では彼の奇妙な世界観を、おぼろげながら実感できる位置にいたのである。

実際、後に、ソーニャに自分の犯罪を告白しようとするとき、ラスコーリニコフはあいに、ソーニャに対する激しい刺すような憎しみを感じるが、その時彼はソーニャの顔に、老婆の妹リザヴェータが殺される前に示した表情を見る。それはスヴィドリガイロフがうつつで見る幽霊の姿の前徴とも言えるのではないだろうか。そしてその後、ラスコーリニコフはペテルブルクの町をさまよい歩きながら、くもの巣ほどの空間の「無気味な永遠性を予感」（5-327）するのだ。

### 五、ソーニャ（重たい現在の時の中で）

マルメラード夫の娘ソーニャは「教育らしい教育」を受けたことがなく、「顔はいつも青白くやせて」いたが、青い目は「透きとおるように澄みきって」（3-183）いた。ソーニャは父親の失職後、内職をして家計を助けていたが、「かくべつ腕におぼえのない」

彼女が一日中働いても稼げるのはごくわずかの金額であり、彼女は家族を養うために自分の体を売つて金を得る決心をする。

ラスコーリニコフはソーニャと瀕死の床についているマルメラード夫の枕元で初めて出会い、一言も言葉をかわさずに別れる。だがすでにマルメラード夫からソーニャの身上話を聞かされたラスコーリニコフに、彼女との出会いは強い印象を与えた。後にラスコーリニコフは、彼が「死人のそばにいた」としてそこで「燃えるような羽毛を帽子につけた」女性と出会ったとラズミーヒンに語る（3-149～150）。

この短い言葉には、ラスコーリニコフにとってソーニャがどのような意味を持ったかが象徴的に語られていると思う。つまりラスコーリニコフは後に「お前だってぼくと同じことをしたじゃないか。お前もやっぱり、踏み越えたんだよ……踏み越えることができたんだよ……お前は一つの生命を滅ぼしたんだ……自分の生命を」（4-252）とソーニャに語るが、ラスコーリニコフはこの時、「燃えるような羽毛」に罪の徴を見たと言えるだろう。

言葉を換えれば、ラスコーリニコフがソーニャの内に見出したのは、その対象は異なれ——一方は他者の、他方は自己の——と同じ殺人者の姿であり、犯罪を犯し血を流しても金を得て現在の非人間的な状況を変えようとしたラスコーリニコフにとって、他者を救うために自己を殺し自分の体で金を得る決心をしたソーニャは、ある意味で彼の先行者であったといつても過言ではない。

そして他方、殺人を犯した後で「方尺の空間」の虚無を激しく感じ、意識的・無意識的に何回も自殺を試みる一方で、「生きた

い、生きて行きたいどんな生きかたにしろ、ただ生きてさえいら  
れればいい！」と激しく念じながら同時に「もしひとりきりにな  
ったら…気が狂うだろう」(4-252)と強く感じていたラスコーリニ  
コフにとって、罪の徵である「燃えるような羽毛」を人前にさら  
しながらお生き続けるソーニャは「ぼくらはお互にのろわれ  
た人間なのだ。だからいよいよ行こうじゃないか！」(4-252)(傍  
点筆者)ということのできる唯一の人間だったと言えるだろう。

そして後に、自らソーニャの部屋を訪れたラスコーリニコフは  
彼女をこれまで支えてきたのが神の存在と復活への祈りであるこ  
とを知る。以下、神の存在をめぐる彼らの緊迫した会話を追っ  
てみよう(4-245～251)。ラスコーリニコフは、もしソーニャが病気  
になつたら、その時、子供達はどうなるのかと問いつめ、さらに  
万一のために預金をすることができないのかと尋ねて、やつて見  
たができなかつたという答えをうると話題を彼女の義理の妹へ移  
す。

「ボーレチカもきっと同じ運命になるんだろうな」「いいえ、  
いいえそんなこと、ありません、違います！ 神さまが、神さ  
まが、そんな恐しい目におあわせになりません！」「だって、ほ  
かの人にはあわせるじやありませんか」「いいえ、いいえ、あ  
の子は、神さまが守つていてくださいます。神さまが…」「だ  
が、もしかすると、その神さまさえまるでいないかもしません  
よ」

彼のこの言葉を聞くと、ソーニャは顔をゆがめて、悲痛な声で

すすり泣き始める。一方ラスコーリニコフは彼女のほうを見ない  
ようにして部屋の中を長いこと歩き回つていたが、ふいに彼女の  
足元に身を投げさせ、ソーニャの足に接吻し、驚いて退くソーニ  
ヤに「ぼくはお前に頭を下げたのじゃない。ぼくは人類全体の苦  
痛の前に頭をさげたのだ」と語る。そしてラスコーリニコフはも  
はやそれ以上、ソーニャを論理的に「問いつめる」ことをせず、  
ただ「それじゃ、ソーニャ、お前は一心に神さまにお祈りするの  
かい？」と尋ね、「もし、神さまがなかつたら、わたしはどうな  
ついたでしよう」と答えるソーニャに聖書のラザロの復活を読  
むよう頼み、彼女はそれを承諾して彼のために、死者の復活の  
章を朗読するのだ。

このように見てくる時、私達はソーニャの世界観もまた彼女の  
父マルクルードフの世界観と同様に神の存在と復活を信ずるキリ  
スト教的色彩の強い世界観であると言えるだろう。

だがそれと同時に、キルボーチンはソーニャが教会には行かな  
いことに注意を向けて、ソーニャの信仰が、公認されて国教とな  
つたキリスト教よりも、圧迫され虐げられた人々が必死の思いで  
信仰していた、國教化される以前の原始キリスト教的色彩を強く  
持つていると指摘しているが、ソーニャの世界観についても、単  
にキリスト教の枠内では収束しえないような、より原始的、ある  
いはより根源的なもう一つの世界観を指摘しえると思う。

たとえばラスコーリニコフは「ひとつ最後に僕に教えてくれ」  
と言い、「どうしてそなけがらわしいこと、それに正反対な神

聖な感情が、ちゃんと両立していられるんだろう？ いつそまたさかさまに水の中へ飛び込んで、ひと思いにかたづけてしまったほうがずっと正しい、千倍も正しい、利口なやりかたじゃないか？」とソーニャに問いただす。

それに対してもソーニャは言葉少なく「じゃ、あの人たちはどうなりますの？」と尋ね返す（4-247）。その時ラスコーリニコフは、ソーニャの「まなざし」の中に、彼女が絶望のあまり「ひと思いにかたづけて」しまうことを何度も真剣に考えたであろうことを直観するのだ。

私達はソーニャの問いに注目したい。彼女はキリスト教では自殺は禁じられていると答えるのではなく、単純に「あの人たちは、どうなりますの」と問い合わせているのだ。この言葉はソーニャにとって現在が個人的な、限定されたものではないことを端的に物語っているように思える。実際ソーニャは重たい現在から逃れて、死を選ぶことはできる。だがその時、彼女が共に生きてきた人々はどうなるのか。彼女は彼らを見捨てることはできない。言葉を換えれば、ソーニャは現在を、他者と共に生きているのだ。

確かにソーニャは「ぼくはわざわざお前のところへ来たのだ。ぼくらはお互いにのろわれた人間なのだ。だからいつしょに行こうじゃないか」というラスコーリニコフに対して、「どこへ行くのですか」（4-252）と尋ね、彼の道を共に行くことには同意しない。だがそれは「ぼくは今日家族を捨ててしまつた」と語るラスコーリニコフの道が、現在を他者と共有することのない孤独な道であ

ることを彼女が感じとったからだと言えるだろう。ラスコーリニコフの道を彼と共に歩く時、ソーニャは必然的に彼女の「家族を捨て」ねばならない。

だがラスコーリニコフが自分の犯行を告白し、「じゃあ、お前はぼくを見捨てないんだね、ソーニャ？」と尋ねる時、彼女は「ええ、ええ。いつまでも、どこまでも」と答え、さらに「わたし懲役にだつてあなたといつしょに行くわ」（5-316）と語るのだ。

このような、現在を共に生きようとするソーニャの姿勢は、ラスコーリニコフを激しく動かし、彼を自首へと導く。そして自首しに行く途中、彼を見つめるソーニャの姿に気付いたラスコーリニコフは「この瞬間、今こそソーニャが永久に自分を離れることなく、運命がどこへ彼をみちびいて行こうと、世界のはてまでも、ついて来るにちがいないと、はっきり直観し、了解した」（6-840）のである。

## 六、ラスコーリニコフと現代

以上、私達はラスコーリニコフが出会った様々な人物に光をあて、彼らの世界観を考察する中で、ラスコーリニコフの世界観とその中における時の構造を浮きぼりにしようとしてきた。その結果、私達はラスコーリニコフの世界観が、ただ一つの確固たるものではなく、時に対する様々な対立的姿勢を内に含んだきわめて流動的なものであると言うことができるであろう。

すなわち、ラスコーリニコフは酒にひたりきつっていたマルメラ

ードフの世界観から強い影響を受けたが、彼が激しく嫌悪したルージンとも、未来の重視と現在の軽視という点では共通する姿勢をとっていた。さらに犯行に踏み切ったラスコーリニコフはスヴェイドリガイロフの世界観をも理解できるような地点に立っていたのである。

そして他方では、肯定的な人物であるラズウミーヒンの生き方に従つて行動しようとしたこともあり、エピローグではラスコーリニコフが大学に在学していた時に貧しい肺病患者の学友を助け、彼の死後は亡友の父親を死ぬまで世話をしたこと、火事の際には自分が火傷をおいながらも二人の子供を助けたことが裁判において明らかにされる。このことはラスコーリニコフが、ソーニャと同じように自分を犠牲にしても他者を助けようとする姿勢を持つていたことを物語っているだろう。

そしてこのように、様々な時に対する姿勢が互いに対立しながら内在する、流動的なラスコーリニコフの世界観は、絶対的な価値観を失つて揺れ動く現代の姿とも通じるものがあるようだと思える。

そして他方、登場人物の一人は「今どき、だれが貴族で、だれがそうじゃないかなんて見分けがつくものか」(6-405)と語るが、確かに過去の慣習から解放され個人の自由が増大した近代および現代においては、個人は理論的には誰しも自分の欲する者になれると可能性を持っている。ラスコーリニコフは「ぼくはナポレオンになりたかった、そのため人に殺したんだ」(5-318)とソーニャ

に語るが、当時にあつてはナポレオンやロスチャイルドがそのような輝かしい成功者の一人であった。そしてその意味においては、貧しい境遇から七等官にまで努力で出世したルーシンもまた、さわめて現代的な人物であると言えよう。

だが自分の利益のみを求める、目的のために手段を選ばないルージンの方法は、ラスコーリニコフが指摘するように「極端まで押しつめると、人を殺してもよい、ということに」なる。そしてラスコーリニコフも、そのようなルージン的方法とその方法によって成り立った世界のあり方に激しく反発しながらも、結局は理想のために現在を軽視し、自分の現在の感情にさからつて殺人にまで踏みきつてしまふ。

ラスコーリニコフは後にシベリアの流刑地で、疫病でかかつて自分が真理を知っていると思いこんだ人々が互いに殺し合いを始め、ついには地球上に数名しか生き残らなかつたという夢を見る(ビグ2-419～420)。それは科学技術の発達に伴つて殺傷力を増しながら相ついで起つた二つの世界大戦と、地球が数回ゆうに破滅するだけの核兵器を有しながら、お互いに正義や理想の名のもとに、軍備拡大が進められている現代の姿を予告しているといえよう。

このような現代の苦酷な状況に対し、ソーニャの存在や彼女の生き方は、つまましくあまりにかよわく見える。だが現在を他の人と共に精一杯生きるソーニャは、ラスコーリニコフに新たな生活への希望を抱かせる。ドストエフスキイはエピローグで「愛が彼らを復活させた」(ビグ2-421)と書いているが、彼らの出会いは現

せは生れる私達は、かやかだが、しかし確かな光を放たかれて  
「君がお見ゆる。

ラスコーリニコフの世界観における「時」の構造とその役割

註

- (1) Georg Lukács, Dostojewskij, Probleme des Realismus II, Georg Lukács Werke Band 5, Hermann Luchterhand Verlag, Neuwied und Berlin, S. 161.
- (2) ヤーベル・ホルツィヤー、「ハルビンとベトナム」『現代思想 九四号』松本耿夫訳、青土社、一九七九年、一八四二～一〇三頁。
- (3) フ. M. ドostoevskij, Бедные люди. Полное собрание сочинений в 30 томах, т. 1, Ленинград, Наука, 1972, стр. 67.
- (4) Ф. M. Достоевский, Преступление и наказание, Полное собрание сочинений в 30 томах, т. 6, Ленинград, Наука, 1973, стр. 166.
- (5) 岸本健次郎『ド・クルト・カヤー・作家の誕生』、文藝書房、一九七九年、一〇一頁。
- (6) Ф. M. Достоевский, Записки из подполья, Полное собрание сочинений в 30 томах, т. 5, Ленинград, Наука, 1973, стр. 100.
- (7) В. Я. Кирпотин, Разочарование и крушение Родиона Раскольникова Москва, Советский писатель, 1974, стр. 21.
- (8) Ф. M. Достоевский, Подросток. Полное собрание сочинений в 30 томах, т. 13, стр. 79.
- (9) 清水孝純、『ズベヌヒバキ一ノハーネ』(『罪の闇』の世界)、九州大学出版部、一九八一年、一一七一頁。
- (10) カリヤーキン、『ズベヌヒバキ一ノハーネ』……』、『ズベヌヒバキ一ノハーネ』村手義治訳、プロトレス出版所、一九八一年、一四四頁。
- (11) Разочарование и крушение Родиона Раскольникова, стр. 230.
- (12) J. M. ヨラ、『ズベヌヒバキ一ノハーネ』、『ズベヌヒバキ一研究・ズベヌヒバキ一全集 別巻』』、『病静訳、筑摩書房、一九八四年、三〇〇頁。
- (13) 「先行者」という用語は、漱石の『浮城物語』を論じた「心の論文」重松泰雄氏「Kの意味」、烟有三氏「心」と「心」用語法に示唆を受けた。だが、清水孝純氏は論文「心の論文」の隠蔽と暴露の構造」よりも、『浮城物語』が「基底的骨格」において『罪と罰』と「浮城物語」を共通する点を特徴づけて指摘している。
- (14) Разочарование и крушение Родиона Раскольникова, стр. 175.
- 〔註〕『罪の闇』の訳は原則として米川正夫氏の訳に従う。ただし『未成年』は工藤精一郎氏の訳を参考にしたが、一部に改変して用ひねば頂いた箇所があつ。なお、引用頁数はすべて原文の頁を示した。)